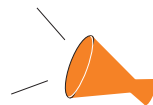


／ 丹波市に住んで ／

くらしの「夢」を叶えたい

固定住促進課（春日庁舎内） ☎ 88 - 5039

「帰ってほしいよー!」



この言葉には、市外に出ている子どもや孫に、丹波市に戻ってきて欲しいという切なる願いが込められています。

市の人口は1990年代から減り続けており、令和2年12月末時点で約6万3千人ですが、このままの状況で推移すると、50年後には約半分の3万人ほどになる可能性があります。人口減少は様々な要因が重なって起こる問題ですが、丹波市では高校卒業後、就職や進学のため市外に転出した人の多くが戻ってこないことが大きな要因の1つです。

その一方で、数あるまちの中から、丹波市の「何か」を求めてこの地に移り住んでくる人が少しずつ増えています。

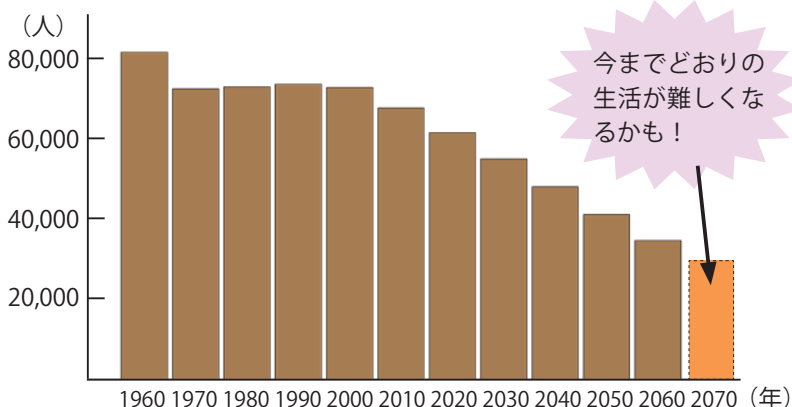
今回の特集では、移住者のインタビューと地域の取り組みを紹介します。移住者の声を聞き、地域の取り組みを知ること、私たちが気付いていないまちの魅力が見えてくるのではないのでしょうか。その気付きをもとに、地域・家庭で「帰ってきたいまち」について考えてみませんか。

▼相談窓口から見る移住者の現状

	相談件数 (件)	移住者数 (人)
H26	241	11
H27	686	24
H28	1,359	23
H29	1,505	29
H30	2,355	52
R1	1,994	56
R2	1,855	60

※ R2 は 12 月末時点

▼丹波市の人口グラフ ※ 2020 年以降は推計値





生まれ育った兵庫県で理想の暮らしを楽しむ

柏原地域在住 月尾さんご一家

移住者の声



月尾 浩之さん (37 歳) 有希さん (40 歳) 優来さん (中2) 惺良くん (小6)
咲菜ちゃん (5歳) うたくん (愛犬)



「便利な田舎暮らしができる場所」を求めて

(話…浩之さん) 昨年の3月に山梨県北杜市から移住してきました。仕事の都合で山梨県に住んでいましたが、私も妻も兵庫県出身。親に何かあったらすぐ会いに行ける距離に住みたいと思い、兵庫県内で移住先を探していました。

移住先を決めるにあたって、私が希望していたのは「便利な田舎暮らしができる場所」。窓を開けたら田園風景が広がっているような暮らしに憧れてはいましたが、子どもが幼稚園児・小学生・中学生なので、通学に不便すぎない土地を探しました。また、子どもたちには、畑で土に触れて人間力を鍛えて欲しいと思っていたので、すぐ住める畑付きの家という条件で物件を探したら、丹波市にたどり着きました。

移住の決め手は人との出会い

移住の前には丹波市の移住相談窓口の方にも親身に相談に乗ってもらいましたし、実は、家の案内をしてくれた不動産屋の方と意気投合し、仕事も紹介してもらいました。同じ

年代にこういう人がいれば安心だと思ったのが、丹波市に住む決め手になったと思います。

愛着のわく家を作りたい

実際に住んでみたら、庭の家庭菜園では野生動物(鹿)との戦いがあったり、うまく行くことばかりではありませんでした。でも、病院もスーパーも近くにあるし、市内で結構何でもそろるので、生活には不便を感じていません。コロナで外出を自粛していたときも、広い庭で子どもが遊べたことは良かったですね。

また、荒れた畑を耕すときに近所の農家さんが快く機械を貸してくれ、その後も野菜を下さったり、とても良くしてもらっています。コロナの影響で集まりが少ないので、近所の人との関わりはまだ多くないのですが、草刈りや消防訓練に参加し、少しずつつながりが増えてきています。

移住して約1年。現在は、子どものために子ども部屋の床を畳からフローリングにするなど、リノベーション(改装)を進めています。庭にテラスやピザ窯、ドッグランなども作り、少しずつ、自分たちにとって愛着のわく家にしていきたいです。



(一社) みつおおじのみなさん(前列左から) 山内佳子^{よしこ}さん、田村庄一^{しょういち}さん、山内一晃^{いっこう}さん(後列左から) 花田裕子^{ゆうこ}さん、山内一明^{かずあき}さん

地域を元気にするため法人を設立

(話：(一社)みつおおじのみなさん)
春日町大路地区は、これまで自治協議会を中心にまちづくりに取り組んできました。しかし、現状大路地区の高齢化率は市内25校区中でワースト2位。空き家が増え、農地が荒れていく中で、それぞれに仕事がある地域住民が持続的に地域を元気にする活動を行うために、「一般社団法人みつおおじ」を令和元年10月に立ち上げました。メンバーは自治協議会の元会長や役員、地元住民、移住者やUターンしてきた人などの10人です。

都市との交流から地区内の交流へ

私たちは、人口減少という大路地区の問題を解決するために、田舎暮らしをしたい都会の人に、この地域に入ってきて欲しいと考えました。

令和元年度は大阪や京都などに住む人と、スイートコーンの収穫体験や虫の鑑賞会などで交流しましたが、令和2年度はコロナの影響で都市との交流を断念。その代わり、地域内の交流に力を入れました。例えば、大路地区には宝塚ホテルのシェフをされていた移住者がおられます。そ

の方にお願いして料理を作ってもらい、感染対策を徹底して地域内の希望者でいただきました。また、地元の若いお母さん方に出演してもらったコンサートや、地域の事業者と一緒にランチ会なども行いました。

イベントの開催自体が目的ではなく、地域に関わるきっかけを作り、地元の方に、地域内のお互いのことをもっと知ってもらうことが、将来的に良い人のつながりになると思っています。

広報紙で交流のきっかけづくり

私たちはイベントに來られなかった人にもみつおおじの活動を知ってもらうために、2年前から毎月広報紙を発行しています。大路地区に移住された方の紹介も掲載し、こういう人がおられるんだということや地域の人に知ってもらい、交流のきっかけになればと思っています。

また、現在大路地区松森にある藁^{わら}葺きの古民家を改修し、農家レストランや宿泊施設にする計画を進めています。この建物がいずれ大路の役に立ち、人が集まるきっかけになれば嬉しく思います。「地域は家族だ」をキャッチフレーズに、最終的に定住する人を増やしたいですね。

地域と移住者の橋渡し

たんば "移充" テラス



(左から) 移住相談員の段畑未登利さん、中川ミミさん、菅沼加奈子さん

ありのままの丹波市を紹介する

(話：移住相談員の中川さん) たんば "移充" テラスでは、市からの業務委託で移住・定住を希望している人の相談にのり、住まいや仕事・生活の情報を提供し、移住者と地域をつなぐ「橋渡し」を行っています。移住後に「こんなはずじゃなかった」と思われずに、事前に良い点も悪い点もありのままに伝え、その人に合わせた提案をするように心掛けています。

常識の違いをかみ砕いて説明

世間では「移住先で地域の人から受け入れられなかった」というような話を聞くことがあります。それは地域住民と移住者の考え方の違いを事前にすり合わせていなかったことが原因。私たち相談員は移住者を呼び込むだけでなく、移住の前に自治会長と移住者を引き合わせてお互いを紹介したり、地域の「当たり前」や風習をかみ砕いて説明するなどの「橋渡し」を一番大切にしています。

たんば "移充" テラスを利用される相談者は、どうしたら自分が夢見ている田舎暮らしがうまくできるのかを知った上で移住したいと考えて

いる人たちです。共に暮らして、一緒にまちを作っていく仲間なんだという認識が広がれば嬉しいですね。

「ゆったりした暮らし」を求めて

丹波市への移住者は年々増えており、そのほとんどが京阪神エリアからの移住者です。以前は30〜40代の相談者が多かったのですが、コロナの感染が広がってからは50〜60代の方が「ゆったりした暮らし」を求めて市内で家を購入されるケースが増えていきます。

スムーズに地域に入ってもらって、地域に住む人や移住者がともに幸せになる未来を目指したいです。



たんば "移充" テラス

- 開設時間 / 月～土曜日の午前9時～午後5時
- 場所 / 柏原町柏原 3619 番地ほか
- 電話番号 / ☎ 090 - 2705 - 4110
- 内容 / 移住に関する相談に対応。住まいの情報を発信する「住まいのバンク」と、仕事情報を発信する「たんばの仕事」ウェブサイトも運営。

住まいる
バンク

空き家を売りたい・ 貸したい人募集中!

「住まいるバンク」では、空き家の賃貸・売却を希望する所有者から情報を集めてホームページ上で紹介し、利用希望者が実際に地域に入られる際の橋渡しを行っています。空き家になってから5年以内に登録された物件の成約率が約80%であるのに対し、5年以上経過する

年間成約率は約50件！空き家を
生かす方法を考えてみませんか？



丹波市住まいるバンク



と44%になってしまいます。特に賃貸の空き家は移住希望者に人気で、賃貸物件は常に不足しています。空き家になってから時間が経つと老朽化が進み、成約率も低下してしまいますので、ぜひ早めに相談ください。

☎たんば "移充" テラス ☎ 090 - 2705 - 4110